

高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川1225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740 (32) 4156

「たかしまとうじゅかい」

副会長 三田村 治夫



「人様に迷惑をかけるなや」「うそつきは泥棒の始まりやで」

などと、我々の世代は親や祖父母から、ことある毎に戒められたものです。同様に毎朝、神棚と仏壇の前で手を合わせる習慣も身につきました。幼い時に刷り込まれたことは、生まれの川に戻ってくる鮭や、南国から毎春育った民家に戻ってくる燕のように、無意識のまま覚えていくのでしよう。こうしたところに、地域での生活体験や保育園や小学校でのふるさと教育の意義があるのだと思います。

しかし、今の子どもたちは、家庭や地域、学校で先のような戒めや体験・教える機会に恵まれなくなってきたように感じます。こうしたことを、私自身が若い世代や若い世代にきちんと伝えてきたのだろうかかと振り返ると、自信がありません。

過日、豊郷町資料館（旧豊郷小学校・ヴォーリズ建築）を訪ねました。当時としては他に類を見ない立派な校舎で、一九三七年に丸紅の

専務取締役であった古川鉄治郎氏の寄付によって建てられたものでした。古川氏は所謂近江商人として成功し、郷土の子どもたちのために尽くされたのでした。



旧豊郷小学校

その日ガイドしていたボランティアの方が、「この学校には、昔から二宮金次郎の像はないが、藤樹先生の像があった」とのこと、今も正面玄関に置かれています。以前の会報で紹介しましたように、日野町においても日野小学校や西大路小学校には藤樹像が設置され、その像は長い間、多くの子どもたちの成長を見守ってきました。このことが、豊郷町も日野町も、いずれも多くの近江商人を輩出し、『三方良し』を経営理念としてきたことに少なからず影響を与えたのではないかと考えられます。

高島でも藤樹先生の教えや生き方に影響を受けたと言われる偉人が少なくないと思われます。戦前の北京で悲惨な状況にあった中国人子女を救った清水安三先生、琵琶湖の洪水から沿岸の農民を救うために命がけ

で瀬田川の川さらい事業を成し遂げた藤本太郎兵衛親子三代（琵琶湖開発総合管理所・『ぼとり』職員のコラム）「近江の偉人」より）です。また、前に会報で寄稿いただいた「松本彦平氏」や「高島玄俊氏」は、藤樹先生との関わりを示す資料は残っていませんが、唯々我が身を省みず、世のため、人のために尽力されたその生き方には、安三先生や太郎兵衛親子三代に通じるものがあります。

偉人ではなくても、『馬方又左衛門』や『あかぎれこうやくの話』など藤樹先生にまつわる逸話の多くが、藤樹先生に秘められた『絶対的なやさしさ』として、四百年にわたって語り伝えられてきたように思います。それは、小川村近辺だけでなく、また一部の偉人だけでなく、高島の地域・高島の人々の中に「おかげさま」「おたがいさま」などと、周りの人に対して気遣い、思いやる精神が根付いてきたのではないかと推察します。

このように考えると、藤樹先生の生き方や教え、特に『絶対的なやさしさ』は、高島の子どもたちにとつて、生きていく上での「心のよりどころ」の一つとなると思います。これは、高島だからこそできる「次の世代に伝えられること」であり、高島藤樹会としてその一翼を担ってきたいものです。

藤樹人間学塾… 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に藤樹思想を学ぶとともに、今日的意義を自分の頭で考え、仲間と議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月原則第一土曜日の午後、開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

高島藤樹会の活動

九月一日（土）、第85回人間学塾を安曇川公民館で開催しました。はじめに八月十八・十九日に尼崎で開催された実践人全国大会に三百四十人が参加され盛会であった話をしました。

次に、『中庸解』の中の「子曰く、中庸はそれ至れるかな。民よくする少なきこと久し・・・」の項を学びました。大意は「中庸は最高の道徳であるが、それをよく行っている者は稀である。その理由は、知者は謙虚にならなければ本物にならない。愚者といえども心に元々純粹な心を持っているので、それを磨けば中庸に至ることができる・・・」。



意見が出ました。

十月七日（日）、第86回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

はじめに九月に孔子の故郷曲阜（きょくふ）を訪問した話をしました。曲阜市では人々が街をあげて孔子を顕彰し来客を歓迎しているの、年間五百万人も人が訪れています。高島市も市民ももっと頑張らなくちゃ……。

そして『中庸解』の中の「子曰く、道はそれ行われざるかな・・・」の項以下を学びました。大意は、舜のような聖人は天と繋がっているの、道（道徳）を行うのは容易であるが、学問を修養する一般の者は自慢の私意（慢心）が邪魔をするので、それを取り除かねばならない。

フリートーキングでは、中庸とは物事の中ほどという意味ではなく、学んで高い見識を身に付けて初めて理解し、実行できることが分かった

等の意見が出ました。

十一月三日（土）、第87回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

『中庸解』の中の「子曰く、人みな我知ありというが、禍根伏在（かこんふくざい）しているのに茫然としてこれを覚らず・・・」の項以下を学びました。大意は、人は自分の知を優れているものとしてそれ以外に知を求めないが、真実の知は才知ではない。中庸の道こそは日常生活の中にあり、天地人に通じる最高の知である。智慧があるなら中庸を選ぶべし。

フリートーキングでは、街の清掃について、ボランティアの方が楽しみながらされている。小中学生に半強制的に掃除をさせて、街がきれいになり喜ばれる経験させるとよいのではないかと等の意見が出ました。

十二月三日（土）、第88回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

最初に「カルロス・ゴーンの高額報酬隠ぺい事件」と「奈良のまるかつ無料食堂」を対比して話しま



した。次に『中庸解』を学びました。人間のなし難いものが三つある。①天下国家を治めること、②高い地位や高収入を辞す

ること、③命を投げ出して進むこと。「中庸の道」は意を誠にし独を慎むことなので、簡易であり平和なものであるが自利の心がはたらくのでほとんど実行されない……。

これを実際に行った人がいました。西郷隆盛です。彼は「命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は始末に困るもの也。この始末に困る人ならでは艱難を共にして国家の大業は成り得られぬなり」と述べ、実践しました。大河ドラマ「西郷どん」でもそれがよく出ていました。まさに彼は『中庸』を人生の指針にしていたのです。

フリートーキングでは、「ゴーンのような自利優先の考え方が広まっていることを危惧している」、「この塾の考えを市内に広げていけば高島は全国に誇れる地域になると思う」、等の意見が出ました。

塾の後は、場所を替えて懇親会を行いました。

この塾に関心のある方は是非覗いてみてください。お待ちしております。

「藤樹人間学塾 今後の予定」

- ◆ 1月5日（土）、2月2日（土）、3月3日（日）、4月6日（土）、5月11日（土）、6月1日（土）、
- ◆ 日時 15時～17時（原則）
- ◆ 場所 安曇川公民館

◆ 印は塾を終了後、別場所で懇親会あり

ひじりの声

上田藤市郎

藤樹書院で、毎月第一日曜日の午後藤樹先生にかかわる講書会を開いている。先月、数年間かかったが、「論語」の講読を終えた。論語の最終章「孔子」の講読が言われた。人間は天から与えられた使命を自覚しない者は、教養人と言えない。社会で礼をわきまえない者は、自立できていない。相手の言葉の真義を聴き取ろうとしない者は、人を本当に理解することはできない。」と、私は読み取っている。

孔子様も藤樹先生も、社会の指導的立場にある者は、自らを慎み研鑽を積んで、なお謙虚であることを示しておられる。今、世界のまた我が国の政治家、企業、大学関係者、スポーツ界地方の首長、議員諸氏の言動を側聞すると、これら責任ある立場の人々が、どのような使命感を自覚しているのかが疑われる。今日では、インターネットの発達によって、内外を問わず所得格差が飛躍的に拡大している。概して指導的立場にある人は裕福であり、自国や自分の所属団体、各界の利益第一、私利私欲を図り、権力を駆使でき、儲ければ内容不問の姿勢が目立つことも多い。この驕りは謙虚さを欠きマスコミに対する不遜な態度は、人の意見を聞く耳をもたずということになる。

今、指導的立場にある人々にこそ「論語」の最終章を味読していただきたいものである。

大洲市への義援金について

大洲市の災害をお見舞いする義援金は、会員四十五人様から二十二万六千円集まりました。ご協力いただきました会員の皆様ありがとうございました。高島藤樹会から少し加えて二十五万円を、11月5日に大洲市の義援金口座に振り込ませていただきました。早速大洲藤樹会会長の上久保政夫様よりご丁寧なお礼状を頂戴しました。(一部紹介します)

「……さて、この度は、高島藤樹会より大洲市民に対して、心温まる多額のお見舞いを賜り、大洲藤樹会よりも厚くお礼申し上げます。貴藤樹会員の激励にこたえて全市民一致固結して発奮興起していく所存であります。ありがとうございました。」

ところで、大洲市は、この夏の前代未聞の大豪雨により大水害に見舞われ日々市民の総力を挙げて懸命の復興活動が続いております。このような状況の中で、大洲市や各種団体等が主催する行事は中止をし、まずは復興ということががんばっておりますが、少しづつ民意も安定し、この秋の大洲祭りや藤樹祭り等の行事は平年通りに盛大に開催することができました。

今後は、一日も早く正常で安定した市民生活に戻れるよう頑張っていく所存です。ここに深く感謝の意を表し、貴高島藤樹会のみならずのご発展と会員の皆様のご健勝を祈念し、お礼まで申し上げます。……」

「藤樹紙芝居」の紹介⑫

『久子夫人と先生』

(解説)

この話は、与右衛門さんが二十八歳で大洲から小川村に帰ってからの家庭生活を中心に描いたお話しです。与右衛門さんは、生活を支えるために酒や米の販売をしながら、自らの学問研究に励みました。しかし、帰郷を知った近江の国の各地から、また、大洲からもたくさんの方々が集まって来ました。そのため、与右衛門さんは次第に多忙な日々を送るようになりました。

与右衛門さんは、学んできた『礼記』の内容に従って、結婚する年齢を三十歳と考えていました。縁あって迎えた久子夫人は、容貌には恵まれていませんでしたが、誠実で心優しい人柄であったと、伝えられています。夫人は、家族のため、門人のため、労苦をいとわず一生懸命働きました。

この間約十年、先生の学究は深まり、「翁問答」「孝経啓蒙」「捷徑医筌」「鑑草」等の教本がまとめられました。久子夫人の支えがあればこそ、門人たちの教育や、著述の充実ができたと言えましょう。残念なことには、久子夫人は与右衛門さんのもとに嫁いで九年目、次男を出産した後の肥立ちが悪く、二十七歳の若

さで亡くなりました。

与右衛門さんの遺徳とともに、支え続けた久子夫人の、温かで誠実な生き方を知ってもらいたいと考え、この紙芝居を作りました。

(紙芝居)

① 先生が二十八歳で小川村に帰って、二年ほど過ぎました。先生の学徳は、いよいよ深く、世の中に知られるようになりました。門人も次第に増えてきました。

与右衛門「ああ、眠い。昨晚は遅くまで起きていたなあ。みんなが熱



心なので、私もついついがんばったぞ。おや、落ち葉がたまっていく。先ずは勉強室の掃除だ。」

先生は、勉強室と庭の掃除をすませ、お酒の商いの準備を大急ぎでしていました。

② お母さんの市さんが、起きてきました。

お母さん「まあ、与右衛門。もう掃除をしたのですか。与右衛門が一

人でなくても、私がしますよ。」
与右衛門「お母さんこそ、ゆつくりしてくださいよ。気にしないでください。」



お母さん

「このごろ、お酒を買いに来てくれる人が多くなりまして。それに、

学問を習いに来る人も増えたので、与右衛門も忙しくなって来ましてね。そこで、与右衛門、そろそろお嫁さんをもらってはどうか。」
 突然、お嫁さんの話を勧められた先生は、驚きました。

与右衛門「はい、そうですね。ぼちぼち考えなくてはいけないと、思っています。実は、三十歳になったらと、考えてはいるのですが。」

お母さん「どなたか、おせわをしていただけそうな方がおられますか。」

与右衛門「はい。伊勢の亀山に、親切な方がおられます。お願いをしてみます。」

③ さつそく、先生は亀山の侍に手

紙を書き、「小川村の私の所に来ていただけるようなお嬢さんを、さがしていただけませんか。」と、お願いしました。何日かすると、亀山からその侍がやって来ました。

亀山の侍「与右衛門どの、良い知らせをもってまいりました。」

与右衛門「私のお願したこと、わざわざ小川村まで来ていただいたのですか。ありがとうございます。さあ、お上がりください。」

亀山の侍「さつそくでございますが、お知らせにまいりましたのは、伊勢の亀山藩士、高橋家の娘さんで、久子さんという方です。かしこくて気立ての優しい方だと、評判の娘さんですよ。」

与右衛門「ほう、それはよい方ですね。ありがたいことです。ところで、



こちら
は、貧
しい浪
人ぐら
しです
が、来
てもら
えるの
でしょ
うか。」

亀山の侍「はい、そのこともお伝えしました。『学問を熱心にされて
いる方で、その与右衛門殿をし

たつて、たくさんの方が勉強に来ておられます。』と、伝えました。すると、たいそう乗り気になられました。『是非、お願いします。』と言われ、話がとんとと進みました。」

与右衛門「そうですか。それはありがたいことです。お世話をかけますが、この縁談を進めていただきますよう、なにとぞよろしくお願
いします。」

④ 先生のお母さんは、亀山からお嫁さんが到着する日を「今か、今か」と待ちました。



お母さん「与右衛門、伊勢の亀山から小川村まで、何日位かかるのですか。」
与右衛門「なれない旅の道だから、

五日以上かかるでしょう。」
お母さん「そんなに。かかるのですか。早く来られるといいですね。」

与右衛門「私の妻になる人だから、お母さんは、そんなに気にしなく

てもよいと思いますよ。」
お母さん「意地悪を言わないでください。新しい家族になるお嫁さんだから気になってしかたがないのですよ。」

⑤ 六日目の夕方、久子さんはようやく、小川村の与右衛門さんの家に到着しました。久子さんのお父さんとお兄さん、弟さんが付き添ってきました。村の人も喜んで家の外に出て、迎えてくれました。

与右衛門「遠い道のりをはるばる来ていただきまして、お疲れさまで



ござい
ました。
私が中
江与右
衛門と
申しま
す。ど
うかよ
ろしく
お願い
いたし
ます。さあ、家の方にお入りくだ
さい。」

久子の父「娘、久子を中江与右衛門様の妻としてお迎えくださいまして、誠に幸せでございます。久子は、心やさしく、よく働くだけを取りえの娘でございます。中江様のお家のくらし方をしっかりと教

えてやってください。」
 久子「久子でございます。何もかも一から教えていただきたいと思えます。どうかよろしくお願いいたします。」
 お母さん「私は、与右衛門の母でございます。一日も早く、この小川村の暮らしに慣れてくださいね。」
 久子「はい、わかりました。」



う。着替えをなされたら、ゆっくりお休みください。」
 久子夫人は、花嫁衣装をぬいで化粧を落としました。そして、ようやくほっとしました。ところが、久子夫人の素顔を見たお母さんは、ぶ

⑥ 次の日、先生と久子さんの祝言（結婚式）が行われました。小川村の人も残らずお祝いに来ました。お母さん「与右衛門、久子さん。皆さんに祝っていただき、幸せでしたね。」

与右衛門「ありがたいことでした。お母さんもお疲れになられたことではないです。」

つぶつとひとりごとを言いました。
 お母さん「まあ、お化粧を落とした久子さんは、きれいな人とは言えないわね。私は、とても楽しみに待っていたのに、残念だわ。いっしょに歩くのもはずかしい。」

⑦ 久子夫人は、数え年十七歳という若さでしたが、心のやさしい落ちついた人でした。先生は三十歳で、門人たちに学問を教えるかたわら、酒を売ったり、お米やお金を貸したりしていたので、大変な忙しさでした。

義助「先生、朝早くからすみません。米を二升（約3kg）貸してください。」

与右衛門「はい、わかりました。急なお客さんですか。」

義助「親せきで法事がありますのでな。」

与右衛門「そうですか。すぐに用意しますよ。」

久子夫人は、先生を助けて家族や門人たちの世話、畑仕事などに、一生懸命働きました。

お母さん「久子さん、いつまでも畑仕事をしないで、早く朝ご飯の用意をしなさい。もうすぐ、与右衛門の講義が始まりますよ。」

久子「はい、わかりました。すぐ、台所に入ります。」

与右衛門「久子、忙しそうだな。す



きます。」

まんがどびんに茶を入れて持って来ておくれ。」
 久子「はい、すぐに持っていきます。」

⑧ そのころ、先生の学問は、ぐんぐん進みました。門人たちには、毎晩、熱心に学問を教えました。夜明けの四時ごろまで続ける日もありました。

与右衛門「久子、今晚の講義は、遅くなりそうだ。先に休みなさい。」

久子「私にも、講義を聞かせてください。尊い生き方や人への接し方がよく分かり、私のためになりますから。」

与右衛門「そうかな。しかし、昼間はゆっくりできないと思うので、夜は早く寝たほうが良いぞ。」

久子「門人の皆さんが、生き生きと学んでおられるのを見ながら、お世話ができるのは、私の楽しみでもあるのです。だから、気にしないでくださいね。」

久子夫人は、与右衛門さんのそば



に座り、講義の内容を学びながら、あんどんの油が切れそうになると、足したり、あたたかいお茶を出したりして、門人たちの世話をしました。このような暮らしをして、一年が過ぎました。

⑨ ある日、お母さんは、与右衛門さんの所へそつとやって来ました。

お母さん「与右衛門、入ってよろしいですか。」

与右衛門「はい、お母さん、何でしょうか。」

お母さん「久子さんはよく働いてくれますが、一つだけ気になることがあります。」

与右衛門「久子が、具合の悪いことをしたのですか。」

お母さん「与右衛門、言いにくいことですが、久子さんの顔立ちが良くないので、今のうちに別れてはどうかと、思っています。」

与右衛門「えっ、お母さん。何ということを……。」



しかし、お母さんの考えはまちがっていません。顔立ちが良い、良くないとい

いうことで、人の尊さが決まるものではないです。」

お母さん「私には、そうは思えないのだけれど。」

与右衛門「では、私の気持ちをお話ししましょう。久子は大変かしこく、その上、やさしくて温かい心をもっています。今、私が安心して学問に励むことができるのは、久子のお陰だと思っています。お母さん、どうか、これからは久子との別れ話など、決して口に出されず、このままにしておいてください。」

お母さん「そうかい。与右衛門の考えや気持ち、よく分かったよ。まちがったことを言って、すまなかったね。許しておくれ。」

与右衛門「お母さん、分かっただけで良かったです。私も、安心してました。」

⑩ 久子夫人が嫁いできてから、九

年の年月がたちました。今では、先生の学問所は絶えず門弟が出入りし、藤樹先生の名前は、ますます有名になりました。久子夫人は二十七



歳になり、家の仕事、門人や子ども世話で、大変忙しく暮らしていましたが、下の男の子を産ん

だあと、急に体を悪くしました。

久子「どんなさま、今日もすみませ

んが、休ませていただきます。」

与右衛門「久子、ここには、忙

しくてゆっくりと休むこともでき

ないだろう。亀山へ帰り、ゆっく

りと体を治しなさい。」

久子「でも、忙しい毎日ですし、子

供もいますから、そうはできません

ん。」

与右衛門「えんりよはいらない。今

は、体を治すことが一番だ。ここ

のことは気にしないで、自分のこ

とだけ考えるようにしなさい。」

先生は、心を込めてやさしく言っ

て聞かせました。そこで、久子さん

は亀山で養生することを決心しまし

た。

⑪ 久子夫人が亀山に戻って、数十日が過ぎました。そんなある日、飛脚が亀山のお父さんからの手紙を持ってきました。「久子の病気は、とても重いです。すぐに来てくださ

い。」と、書いてありました。

驚いた先生が、大急ぎでかけつけ

た時には、久子夫人は、その二日前

に息を引き取り、葬式もすんだ後で

した。先生は、お墓の前でひざまづ

き、涙をばらはらと、こぼしました。

与右衛門「久子、こんなにつらく悲

しいことはないぞ。私は、何と言

えばいいのだ。」

先生の心には、久子夫人がここ

にこし

ながら、

明るく

みんな

のため

に働い

ていた

姿がう

かんで

は消え

ました。

与右衛門「久子、勉強好きだったな。

門人たちと真剣な顔をして学んで

いたぞ。私はとてもうれしかった。

そして幸せだった。きびしい母の言葉にも、すなおに『はい、はい』とこたえて、がんばってくれたな



正保元年四月没

あ。男の子二人がようやく元気に育ってくれて、私も久子もどんなにか幸せだったことか。あれもこれもみんな久子がよくやってくれたお陰だぞ……。」

先生の心には、家族のため、門人たちのために、一生懸命働いてくれた久子夫人のことが次々と思いつき、さされました。ただただ、一心に手を合わせる先生でした。

（おしまい）

▼脚本・挿絵

高島藤樹会教材委員会

▼制作委員

足立清勝 飯田典子

石黒紀代子 北川暢子

清川貞治 高谷美智子

山本義雄 (五十音順)

▼参考文献

○児童用副読本『藤樹先生』

(高島市教育委員会発行)

○ふるさと伝記まんが『中江藤樹』

(安曇川町教育委員会発行)



寄稿

『論語に学ぶ』

川越 清司

最初から大きなテーマで赤面いたします。本年七十一歳になり、残りの人生において矩（のり）を踰（こ）えずに過ごせることを願っている今日この頃です。小さい時より祖父父母が何となく言われていた言葉を思い出されます。例えば過ぎたるは猶及ばざるが如しや、倦（う）むことなかれとか、何も意味が分からなくても年を重ねるとともに何となく漠然と解ってくるようになりました。

そんな時に藤樹先生生誕四百年祭事業の役員をさせて頂いたとき、論語と親しくなる機会を得ました。当時九十歳になられた伊與田覺論語普及会学監でした。かくしゃくとされて温かくて厳しさをおぼえる気風を持ち合わされておられました。月に一度学監の論語の講義を拝聴する機会が得られ、目から鱗が落ちる連続でした。その中の一つに『或（ある）ひと曰く、徳を以（もつ）て怨みに報いば何如

（いかん）。子曰わく何を以てか徳に報いん。直（なお）きを以て怨みに報い、徳を以て徳に報いん。』（憲問第14）の章句に出会いました。この言葉は、わたくしの今までの価値観を大きな舵を切る言葉でした。それはすべての人に、寛容の精神で応対するのが最善なことだと思つて生活をしてきました。そうすると中にはどうしても許せないことに出会つても心を大きく持つて応対するのですが、そうすると、どうしても歯切れが悪くどこか釈然としないことで終わつてしまうことが多々ありました。そんな私の性格が周りには、あの人はいい人だに写つたのかもかもしれません。そのようなときに前出の論語の章句に出会いました。それは“直（なお）きを以て怨みに報い”という言葉です。この言葉ですくわれた感がありました。それはよこしまな事は正直に対応せよとの教え、そんな簡単なこと何言っているのかと思われませんが、この章句に出会わなければズルズルとこのままで寿命を迎えると思うと冷汗がでるおもいです。論語には人それぞれに又時々この様な効果があると思われまます。

この年では記憶力が悪くなか

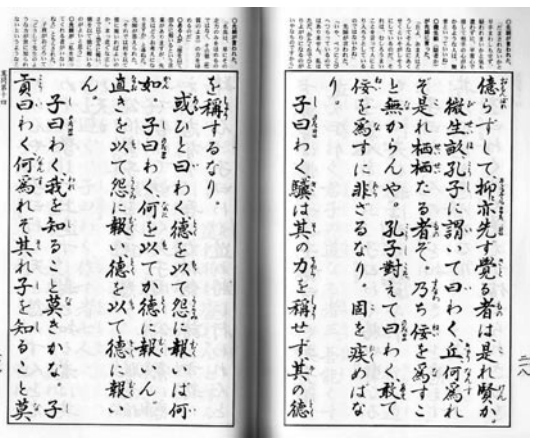
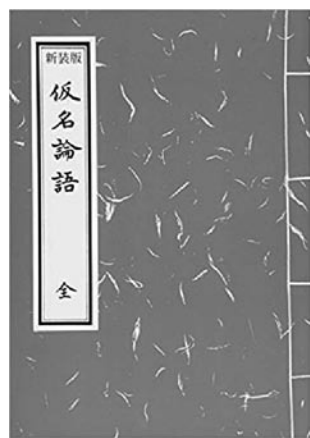
なか覚えることが出来ませんが、読書百遍自ずから意通ずると言われていきます。私はもう試験がありませんので気楽に素読を楽しんでいきます。素読とは声を出して読むことです。伊與田覺先生の言葉に古典を学ぶ上に於いて大切なことは「素読」です。素読は天命に通ずる先覚の書を、自分の目と口と耳とそして皮膚を同時に働かせて吸収するのです。これを読書百遍で繰り返し繰り返し繰り返すことによつて自ら自分の血となり肉となるのです。それが時あつて外に滲み出ると風韻となり、そういう人格を風格ともいうのです。おしゃつておられます。また明治大学教授齋藤孝先生も素読は意味を理解するというより、何度も音読して言葉を体に刻み込む学習法です。精神性の高い文章を素読によつて自分の内側にしつかり入れるとそれが力に代わるのです。その素読のテキストの筆頭は論語だとおっしゃつておられます。

近頃何となく知らず知らずのうちに論語の章句が口に出てくるのには嬉しいやら恥ずかしいやら。論語読みの論語知らずとよく言つたもので、少しわかつてくると恥ずかしくて人前で話

すのはできなくなりまます。会員の皆様には仮名論語をお勧めします。藤樹書院で取り扱つておられていきますので、是非お問い合わせしてみてください。

最後まで駄文に付き合つていただいたことに感謝申し上げます。

高島藤樹会の益々のご発展を祈念し、又会員の皆様の幸運を願います。



藤樹書院・良知館通信⑧

「藤樹書院参拝者の推移とアンケート結果」

志村 洋

《参拝者数は？》

藤樹書院には全国各地や最近では中国、韓国から参拝者の方が来られます。「藤樹書院には年間、何人くらいの参拝者があるの？」

参拝者の状況を報告したいと思えます。手元に記録のある平成九年度から見ていくと、次表のような状況です。

平成二十年は中江藤樹生誕四百年祭があり一万人を超える参拝者がありましたが、その後は五千人〜六千人で推移しています。(単位は人)

平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年
4379	4107	4337	3863	3687
平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年
3629	3735	6769	5658	8045
平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
7645	11274	5352	5282	4911
平成24年	平成25年	平成26年	平成28年	平成29年
6132	5489	6168	5624	5124

月別で見るとやはり四月、五月、十一月の気候の良い時期、行楽期が五百〜六百人と多く、二月が二百人台で、積雪期や寒さで出難いかと思っています。平成三十年度は「猛暑の夏」もあって

例年どおりの五千人になるのか？どうか？という状況です。

《参拝者のアンケート結果》

藤樹書院では参拝者の皆さんからご意見・感想をいただいています。藤樹書院の一日は、書院境内と良知館の掃除から始まりますが、「庭が美しい」「庭の手入れも行き届いている」と言った感想をいただいています。

そのほか、「解説の内容がとても面白い、扁額を一人で拝見してもよく判らないが、意味を持って知ることが出来た。又、実際に住み教ええられた土地を訪れることができたことも嬉しい。」「『致良知』私も心掛けていきたい」と思いました。「町全体がとてもきれいで、整っていてきちんと暮らされている事を感じました。藤樹先生の教えが受け継がれていると感じました。」「藤樹先生の思想に触れる事が出来、楽しめました。」「『藤樹』という名前の由来や教えを知り、とても勉強になりました。」「どうぞ後の世にも繋げて行って欲しいです。」など。

参拝者の皆さんから意見は少ないのですが、藤樹先生の教えについて学ぶことが出来たなど、永く続いてきた参拝者への説明によって理解が深まったと思われる感想が多く、引き続き参拝者の皆さんを温かくお迎えしたいと思っています。年中無休です、思い立ったら藤樹書院へ。

賛助会員一覧

- ご協力ありがとうございます
- ウェストレイクホテル可以登楼
 - 株式会社 大山建設
 - 川島酒造 株式会社
 - 株式会社 桑原組
 - 有限会社 宏和商事
 - 税理士法人・小畑会計事務所
 - 有限会社 白浜荘
 - 社会福祉法人 新旭みのり会
 - ソエダ 株式会社
 - 田中マネジメント事務所
 - 株式会社 TADコーポレーション
 - 鉄屋商事 株式会社
 - 寺子屋まなざし童心塾
 - 株式会社 戸井薬局
 - とも栄 藤樹街道本店
 - 中村印刷 株式会社
 - 株式会社 中村測量設計
 - ニッケイ工業 株式会社
 - 有限会社 馬場塗装
 - 三田村印刷 株式会社
 - 有限会社 綿庄食品店
- (五十音順)

お願い

寄稿やご意見(藤樹会や本会報等について)をお寄せください。

〒520-1531
高島市新旭町饗庭 2788
三田村治夫(広報担当)宛
TEL・FAX: 0740-25-2246

E-mail:
mitamura.haruo@ruby.plala.or.jp

あとがき

周りの人々の幸せを…

平成最後のお正月を迎えました。本年が皆様方にとって幸せな年となるよう祈念いたします。

さて、この暮れに「幸せな明日をめざして」の特集(朝日新聞12月31日)に、二度の宇宙飛行を経験された向井千秋さんの『自分ファースト』捨ててこそ」と題してのメッセージがありました。多種多様な生命体が共に暮らす豊かな地球。貴重な多様性を守るには、個人が自分を第一に考える「○○ファースト」ではなく、周りの人々の幸せを考えて行動しなくてはなりません…と、続いていきます。

確かに今の社会は、人や家・村の孤立化が進み、いじめ、セクハラ、パワハラ等人権侵害事案が顕著化するなど、人々の共生に逆行する流れが見られます。ただ、こうした時勢への危機感から、「絆」「繋がり」「協働」「ボランティア」を重視する、所謂「揺り戻し」も頭れてきています。

向井さんの「周りの人々の幸せを考えて行動する」に応えて、自分のできる範囲での小さな一歩を歩み出す年にしたいです。

地域の福祉サロン・見守り活動で、子供たちを温かく見守る地域学校協働活動で、災害時の共助に向けて、

…
(H・M)